「恐れないで、ただ信じていなさい」
マルコ５：２１-４３

平吹光太　２４.６.２３

I. ２つの出来事（21-26）

湖の反対側から戻られたイエス様の元に多くの人が押し寄せたため、イエス様は湖のほとりに留まられた。すると会堂司でヤイロという人がイエス様の元に来た。彼は社会的地位が高く、人々から尊敬される人物。ヤイロはイエス様の足元にひれ伏し、「瀕死状態の私の娘の元に来てくださり、娘を助けてください」と懇願した。ヤイロはそのような娘の最後を看取るような状況でも娘の元を離れて、イエス様なら娘を癒す事ができると信じ、最後の望みをかけて御元に来た。イエス様はヤイロの信仰を見られ、彼と共に彼の家へと向かわれた。大勢の群衆もイエス様とヤイロについて行ったため思うように進めなかった。

そのような中で 12 年間、病名は分かりませんが、出血を伴う病で苦しむ女性が群衆の中にいた。モーセの律法では、不正出血が止まらない女性は儀式的に汚れていると宣言され、その病気が完治するまでは、人との接触、宗教行事への参加は制限されていた。この「汚れ」は儀式上のものであり、その人の人格が人よりも劣っていることを意味していない。しかし当時のユダヤ人社会での多くの人は、汚れていると宣言された者は、神から呪われている者とみなして差別をし、また触れる者も汚れた者とされていたため彼女の周りには誰も近寄らなかった。そのため、彼女は社会から見捨てられ、礼拝に行くことさえできない状態であった。彼女はこの悲惨な苦しみから抜け出すためには病気を治してもらうしかないと医者に診てもらうが、医者達にはひどい目にあわされ、挙げ句の果てに全財産を使い、無一文になり、さらに状態は悪化した。彼女は、肉体的、経済的、精神的、霊的な痛みを抱えて心身共に極限の状態であった。

II. 長血の女性の救い（27-29）

そのような時に彼女はイエス様の噂を耳にして最後の望みを持ってイエス様の元へと向かい、イエス様の衣に触れた。彼女がイエス様の衣に触れただけなのは、触れさえすれば癒されるという信仰と、その他に恐らく自分は汚れた身でイエス様に話しかける事は無礼であり、また多くの人の目がある中で汚れた自分が気づかれないようにイエス様の衣に触れるだけで精一杯であったからでしょう。これで癒されなかったらもう駄目だという思いであったことでしょう。しかし、するとすぐに血の源が乾き病気が癒された。彼女はそれを体に感じた。

（30-33）

イエス様はすぐにご自分のうちから力が出ていったことに気がつかれ、群衆の人たちに誰が着物に触ったのかと言われた。弟子たちは沢山の人があなたに押し迫っているのに誰がさわったのかとおっしゃるのですかとイエス様に言った。つまりヤイロの娘が危篤状態で一刻も早く向わなければならないのに、なぜ今イエス様はそんなのんきな事を言われるのかと弟子たちは思ったということ。けれども、イエス様が群衆を見回していると、イエス様の衣に触れた女性が恐れおのの

いてイエス様の前にひれ伏して真実を全て打ち明けた。その間にも時間はどんどん過ぎていく。弟子たちからしたら身元不明の女性に足止めされて苛立っていたはず。それ以上にヤイロの心の中はイエス様早く来てくださいと泣きそうになっていたはず。そのような中で 34 節。**「イエスは彼女に言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。』」（34）。**

なんという慰めの言葉でしょう。イエス様は 12 年間肉体的、経済的、精神的、霊的にも苦しみ、限界寸前であった女性の最後の望みをかけてすがるような思いの信仰を喜ばれ救ってくださった。彼女は１２年間、苦しみました。しかしそのことを通してイエス様に出会い救われた。

III. 恐れないで、ただ信じていなさい（35-36）

そんな喜ばしい出来事とは反対に、イエス様が彼女と話しておられる時に会堂管理者の家から人が来て、**「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか。」（35）**とヤイロに言った。ヤイロの心情はどうだったか？体が崩れる程の絶望感に襲われたはず。この身元不明の女性、または真っ先に来てくれなかったイエス様を恨んだかもしれない。そのようなヤイロにイエス様は言われる。

「イエスはその話をそばで聞き、会堂司に言われた。『恐れないで、ただ信じていなさい。』」（36）

「恐れないで、ただ信じていなさい。」は、原文では、現在命令法が使われているため、直訳すると「今恐れているのをやめて、信じ続けなさい」。恐らくヤイロはイエス様を信じていたからイエス様の元に助けを求めに来た。しかし状況は変わり、自分の娘が亡くなったと聞いて絶望し心の中は恐れでいっぱいであった。しかしイエス様はヤイロに神を信じるなら恐れる必要はなく、また信仰は一時的にその時だけ信じるものではなく継続的にずっと信じ続けることが重要であると言われたということ。

IV. 最善を成される主（37-40）

そしてイエス様はヤイロの家に３人の弟子たちだけを連れて行かれた。家に着くと大声で泣いたりわめいたりと取り乱している人たちがいた。当時のユダヤ人社会には、お葬式の時に家族のために大声で泣き叫ぶ職業の人と笛吹く職業の人がいた。

そのような中でイエス様は大声で泣き、わめき、取り乱している者たちに厳しい言葉で**「出て行きなさい。その少女は死んだのではなく、眠っているのです」と言われた。（マタイ 9:24）。**すると泣いていた人たちがイエス様をあざ笑った。本当に悲しみの中にいるなら、あざ笑うことなどできないはず。そのためイエス様はそのような人たちを外に出され、その娘の両親と弟子たちだけを連れて娘の部屋に入られた。

（40-43）

「タリタ、クム」とはアラム語で直訳すると「小さい女の子起きなさい」。この言葉は母親が幼い娘を朝起こすときに使う言葉。イエス様が少女の手を取ってタリタ、クムと言われた時、死か

らよみがえった。そこにいた両親、弟子たちは言葉が何もでない程に驚きました。イエス様はこのことを誰にも知らせないように厳しくお命じになられ、少女に食事をさせるように言われた。この少女は 12 歳でした。ユダヤ人社会では女性は 12 歳で成人として扱われた。イエス様がおられなかったら、これから一人の大人の女性としての人生はなかった。また、12 年間重い病で苦しんでいた女性はイエス様がおられなかったら、亡くなっていたでしょう。しかしイエス様はこの２人の女性が生きるように力をお与えになった。なんと情愛に満ちたお方でしょうか。
なぜイエス様はこの驚くべき出来事を誰にも知らせないように命じられたのか？それは、イエス様が来られたのは、病や死人を復活させるためだけではなかったから。神はイエス・キリストを信じるなら、この地上において必ず病気が癒やされ死んでも生き返るとか、またどんな苦難、困難、問題も瞬時に解決されるとは約束していない。敬虔な信仰を持っている人でも病気になります。癒やされないこと、苦難から解放されないのは信仰が足りないからだと言う人、それによって苦しむ人が沢山いる。必要以上に自分を人よりも劣っているなどと思う必要はない。癒しというのは一時的なもので、良くはなるが、誰でもいつかは必ず死を迎える。イエス様が来られたのは、一時的なこの世での癒しではなく、永遠の罪からの救いをお与えになること、またどんな苦難、困難、問題があっても、全てを益と変えてくださる主に信頼し歩むため。※証

結：1. 12 年間病気で苦しんでいた女性は長い間、なぜ私だけこんなに辛い思いをしなければいけないのかと神や自分を産んだ両親、社会や人々を恨んでいたかもしれない。けれども、その苦しみを通して彼女はイエス様の元へと導かれ、癒やされ救われた。もし彼女が順風満帆の生活をし、神を求めることが無ければ、イエス様を信じずに滅んでいたかもしれない。彼女は苦しみにあった１２年間の事は辛く苦しいことであったが、そのことを通してイエス様に出会い救われたことで今までのことをも感謝に変えられたはず。

2. 危篤状態であった 12 歳の少女はイエス様が来られるのが遅くなり亡くなってしまうが、イエス様によって生き返った奇跡を見た。イエス様に信頼していた少女の父であるヤイロはこのことを通して、時間、空間、命も死も全てイエス様がご支配されているという事を知る必要があり、どんな状況でも主に信頼するということを教えられる必要があった。

私たちはどうか？問題や絶望するような事が起こり、心の中が不安や恐れでいっぱいになる時、目の前の問題ではなく主を見上げることができているか。「恐れることをやめてただわたしを信じ続けなさい」と私たちの必要を全てご存知であり、どんな状況や状態の中にあったとしても最善をなしてくださる主を信じ委ねて歩んでまいりましょう。
「見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は決して失望させられることがない。」（Ⅰペテロ 2:6）